

# 黒崎町の歴史

## 新聞からたどる黒崎の歴史 (四)

大正十二年大野尋高校では、大野町青年団主催の雄弁大会が開かれた。

(先月号からの続き)

### 県会議員被選挙格と町村吏

町村長及び助役其他選挙事務に關係のある吏員にして其の關係区域に於いて県会議員候補たらんとする者は選挙期日一カ月前に辞職し、衆議院議員候補たらんとする者は三カ月前に辞職せざれば被選挙格を有せざる事となるが、当地の新聞紙中彼等を混同し、県会議員候補も衆議院候補の如く三カ月前に辞職す可きものと誤解し、過半右に關する注意を与えたるものなり。これに惑わされてか本日、即ち今二五日は恰も九月二五日の県会議員選挙期日の三カ月前の日になれば、本日町村吏の職を辞さざる者は県会議員の被選挙格を失うに至る可しなどと言う者あれど、右に言う如く一カ月前までに辞職すれば足るものなるをもつて疑を解かんが為にこれに掲ぐ。以上

これによると、町村長等の公職にある者が県会議員に立候補する場合、選挙期日の一カ月前に、同じく衆議院選に立候補する者は選挙期日の三カ月前までに辞職しなければならないとい

うのである。ところが、本町の萩野氏、山際氏、米川氏、岡田氏と、ともに主長のまま各種議会議員を兼務しているのである。近年わが国の国会では、行政改革が盛んに論じられるようになった。その一つに地方分権の問題がある。先達て衆議院議員選挙のころだったと思うが、どこかの県知事が、知事も参議院議員を兼ねることができればと言ふのを聞いたような覚えがあるが、これも前記の記事から考え印象的だった。

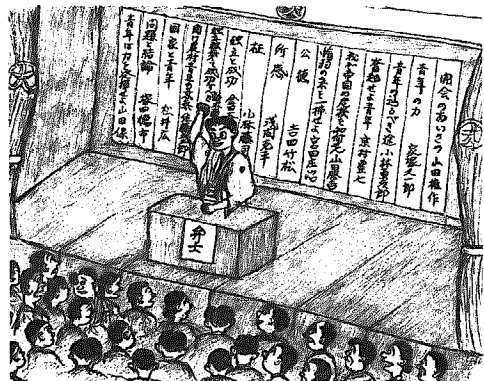
### 大野青年団の雄弁大会

大正十二年三月二十三日記

既報西蒲原郡大野町青年団修養部主催の雄弁大会は二十日午後七時より、大野町大野尋高校に於て開会されたが、此の日出席者は黒崎青年団長松井広氏を始め、評議員塚田徳市、上野三、岡庭、山田同校訓導其の他町有志者と、地元青年団員百余名に近郷青年団員の来聴をも加う。定刻主催者修養部長山田権作氏は開会の挨拶を述べ、次いで

規定のプログラムによりて熱弁を振ったが、時間の都合により午後十時山田権作氏の閉会の辞にて散会した。尚同夜は余興として大野校六年生徒の童話劇「一人の改心」「留守番」綴方の題ありて非常に盛会であった。当日の弁士演題左の如し。

- (1) 開会の挨拶 山田権作
- (2) 青年の力 家塚久一郎
- (3) 青年の辿るべき途 小林勇次郎
- (4) 奮起せよ青年 宗村豊七
- (5) 我が帝国の危機を如何せん 山田勝吉
- (6) 情弱な氣を一拂せよ 宮田庄治
- (7) 公聴 吉田竹松
- (8) 所感 浅間克平
- (9) 証 小林藤治
- (10) 独立の成功 金田太吉
- (11) 独立独歩して成功すべきか 鈴木栄三郎



- (12) 聞け農村青年の意氣 佐藤立三郎
- (13) 国家と青年 松井広
- (14) 問題と結論 塚田徳市
- (15) 青年は力を發揮せよ 山田保

大正十二年三月二十日大野校で開かれた大野町青年団修養部主催の雄弁大会の様様である。雄弁大会と新聞にあるが、村の人たちは弁論大会と呼び、当時村内でこの集落でもこのような大会が盛大に行われていた。この日大野校の壇上に立った青年弁士十五名の鋭利たる主張が目に見えるようである。

當時の時代背景  
大正三年(一九一四)七月第一次世界大戦が勃発し、戦乱はたちまちヨーロッパ全土に広がった。イギリスが参戦するとわが国も日英同盟のよしみにより八月二十三日ドイツに宣戦を布告した。日本軍は直ちに行動を開始してドイツ極東艦隊を全滅させるとともに、山東半島のドイツ勢力を一掃した。しかし、参戦の真のねらいは辛亥革命後、日も浅く弱体な中国に勢力を伸ばすことであつた。ヨーロッパが戦場となり列強がアジア市場から後退すると、日露戦争後の不況に苦しんでいた日本経済は息を吹きかえし、産業界はにわか活気づいた。新潟県でも農業に比べていちじるしく立ち遅れていた近代工業がようやく勃興し始め、その発展の基礎を築いたのはこのころであつた。

た。明治から大正末年まで衆議院は元より、県会においても議員はことごとく地主か実業家か、官僚出身など資産に恵まれた人々であつて勤労者ではなかつた。したがつて争うべき政策の差異は少ないはずではあつたが、排他的な感情で闘争を行い、とかく寛容を欠いたことはいない。

大正時代は、教育の普及、産業の発展等の成果とあいまつて民権が伸長したときであつた。選挙権も拡張され、議会の政党的意向を無視した特権的超然内閣は存在できなくなつていった。雑誌や新聞も民意の重視を説き、「民主主義」(デモクラシー)の訳語という新語が普及した。

### 新潟県百年のあゆみより

こうした時代、今から七十三年前のことであつた。開会の挨拶を述べた山田権作さんは、新町の人で、黒崎役場に勤め、黒崎の生き字引きといわれた人であり、山田さんの書いた昭和初期の黒崎村報の記事は、今も貴重な町の資料となつてゐる。(2)「青年の力」を述べた家塚久一郎さんは、仲町にあつた料理屋家塚屋の人で、この人も家業の傍ら役場に勤めていられた。昔の在郷人の一人で姿勢の良さが今も記憶に残つてゐる。(3)「青年の辿るべき途」の小林勇次郎さんは新田町の人ということしか分からなかつた。(続)

※注 ■は判読不明文字。